

文豪が泣く

森野 水琴

彼の所属するサークルで文豪を演じる企画が募集された。世界中の文豪から一人選んで、その人となり演技しようという企画である。脚本は日本語で書いてよいが、外国の文豪を選んだ場合、外国公演も視野に入れておくようにとのことである。何年かかってもいいから納得できる企画にする必要がある。

いろいろ悩んだ末、彼はトルストイを選んだ。かの文豪が今の世の中を見た嘆きを表現してみたかったからである。

非暴力主義を含め、かの文豪から学ぶことは多い。

外国公演するとなるとロシア語の勉強が必要になる。ロシア語を母語とする人を感動させてこそ演じる意義がある。

自分の演技をきっかけにして世界中の人がロシア語で平和を語るようになれば、どんなに素晴らしいことだろう。

ロシア語で包み込んでしまうことになる。

そのような夢を実現させるために、しばらく封印していたロシア語を学び始めることにした。

またひとつ彼の外国語の窓が開かれていく。

トルストイは天上の収容所で平和について教えている。

天上の収容所は地上で文化財を破壊した者が死後に入る収容所である。

収容者たちに教えるためにトルストイが熱弁する。その熱弁ぶりに感化されて、トルストイに弟子入りした者たちが講義を手伝っている。

弟子たちの何人かは生まれ変わり、地上の安全な国に降りて、成人すると平和について教える。

トルストイも生まれ変わり、故郷に降りたいのだが、受け入れてくれそうもないので天上に留まっている。嘆きの声が聞こえてきそうである。

新年を迎えた彼に天上からの手紙が届いた。トルストイの分身たちが天上から降りてくるといふ。分身のひとりが彼を訪ねてくるとのこと。トルストイは日本語で会話できるので心配することはない。宗谷岬を訪りたいので案内してもらいたいとのこと。彼の分の航空券が同封してあった。

間もなくしてトルストイの分身が訪ねてきた。一般の人たちにはトルストイの分身が見えないので内密にするようにとのこと。二人きりの時だけ会話できる。一般の人にはトルストイの分身の声は聞こえない。念のため携帯電話に話しかけている動作をするといふとのこと。

手紙に同封されていた航空券を利用して彼は宗谷岬に移動する。トルストイの分身は彼についていく。宗谷岬での出来事は拙作『海が泣く』にしたためることにする。

宗谷岬から彼が帰ってきた。別の分身たちに宗谷岬を任せて、トルストイの分身も帰ってきた。

日本海側にトルストイの分身たちを配置して、平和の防波堤を作ろうというプロジェクトが立ち上がった。彼もプロジェクトに参加することで、トルストイの分身から多くを学ぶことになる。

ここで拙作を完結し、彼の学習成果については不定期に報告することとした。